

熊野の駅を置いたのもこの附近だったろうと云われています。

封建時代になってからも、関門が設けられ熊川宿、または熊駅とよばれていました。

むかし。

この附近に勤勉な老夫婦がすんでいました。夫婦のあいだにはなぜか子どもが生まれませんでしたので、齢老いても野良仕事にはげんでいました。

野山の若葉が日増しに緑をまして田植えも間近い五月のある日の事でした。

老夫婦は朝早くから野良に出て二人仲良く荒代かきをしていました。お爺さんがマンガを押し、お婆さんは泥田の中をころびながら泥まみれになって馬の鼻どりをしていましたが、お婆さんが急に腹痛をおこして仕事どころではありません。

「お爺さんや、ちょっと家に行って横になって、なおったらすぐくるからまっておくれよ。」

「いいとも、いいともゆっくりなおしてきな。」というのでお婆さんはたんぼからあがりました。

独りのこされたお爺さんは、一人で代掻きもできずに途方にくれて、たんぼに腰をおろしたまゝ、ボンヤリと雲間を裂くような不如帰の声に耳をかたむけていました。

「お爺さん、困っているんだらう。僕が手伝ってあげるよ。」いつの間に、どこから来たので